

県研究主題

児童一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善

提案 1

提案者 佐藤 美沙樹（湘南三浦地区）

<研究主題>

探究活動を楽しみながら主体的に学ぶ子どもたちをめざして

— 海洋教育を通じた学ぶ力の育成 —

1 提案内容

(1) はじめに

三浦市は海洋教育に取り組んで6年目となる。三浦市には、海洋教育部会というものがあり、全ての学校で海洋教育の推進及び教材開発を行っている。海洋教育では、「海に親しむ・海を知る・海を守る・海を利用する」の視点で学んでいる。

(2) 本单元について

- ・ 三浦や三崎、三浦半島を囲む海で生きる生物等について自分の課題をもち、進んで調べることを通して、海への親しみを持つ。
- ・ 地域の海のすばらしさに気付き、三浦の海を大切にしていこうとする気持ちを育てる。

(3) 本時について

○ 本時の目標

- ・ 博物館見学を振り返り、発見したことや疑問に思ったことなどを友達に伝えることを通して、今後の活動の見通しをもつことができる。
- ・ 意見交流で友達へ質問したり、質問に答えたりする活動を通して、解決している課題、新たな課題などを明確にし、次時の活動の見通しをもつことができる。

(4) 授業の実際

博物館見学では、博物館の先生が魚を朝から並べておいてくれ、当日はじっくりと話を聞くことができた。後日、振り返りを行い、児童は自分が調べたこと、博物館で面白かったことなどを自由に発表していった。

(5) 成果と課題

全15時間の单元であったが、児童と楽しく海の学習を行うことができた。冬に行った单元であったこと、磯を観察する予定だった日が天候不良であったことから、実際に海に出て体験しながら学習することはできなかったが、観音崎自然博物館のタッチングプールで海の生き物に触れることができたことはよかった。

この学習を始める前は、海があまり好きではないと言っていた児童もいたが、調べ学習を進めていくうちに興味が高まり、「海を好きになった」「三浦ってすごいな」という感想を聞くことができた。

## 2 協議内容 「探究的な学習にしていくための工夫・改善」

Q どうやってこの学習を始めたのか。

A 「みんなにとって海ってどんなところ」という学習に2～3時間、話し合い活動として時間をとった。自分たちが調べたいことを決めるまで待った。

Q 1、2年生では海の学習を行っているのか。

A 海洋教育についてはどの教員もできるわけではない。低学年からの系統性は上手にできていないのが現状。生活科の磯遊びで海に関わっていく活動をつくっていけるとよい。

Q 1学期からはじめていればよかったのではないか。

A 海のことにとっぷり浸かれば確かに良かった。しかし、総合＝海洋教育と形骸化してしまうことだけは避けたい。

Q 全員で一斉に学習を進めていくと、調べ学習が苦手な児童もいる。そういう児童に対してのフォローは。

A 何人かいたが、決められるまで待った。それぞれ、ポスターをかいたり、海の名前に興味を持ったり、途中から学習に乗って来た。

Q 単元目標の2つ目の具体的な終着点は。

A 三浦の海をきっかけに、もう少し長い単元だと人に出会わせる経験を作ることができたと思っている。

## 3 まとめ

- ・ 提案が海を素材に自ら学び考える力を実施できるような題材であった。
- ・ 三浦にしかない、地域にあるものを題材にすることで創意工夫を生かすことができた。
- ・ 観音崎の先生のようなキーパーソンを探すことは、教員のコーディネート力である。外部とのつながり、出会いを大切にしたい。
- ・ 社会に開かれた教育課程に非常につながる取り組みであった。

## 提案 2

提案者 安西 透 谷口 紀代美 (横浜地区)

### <研究主題>

探究的で深い学びの実現に向けて

## 1 提案内容

### (1) 『探究的で深い学びの実現に向けた授業改善』について

次期学習指導要領では、授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」が挙げられている。そこで、探究的で深い学びの児童の姿とはどのような姿なのか、また、その姿が見られるためには、どのような手立てが必要なのかについて提案された。

#### ① 実践 小学5年生『あやとりで まちの輪を つなごう』(全70時間)

まちに住む人々とつながるために、自分たちにできることはないかを話し合い、様々な世代の人々と楽しみたいなどの思いから、「あやとり」を学習材とした。

#### ○ あやとりで楽しんでもらってまちの人と交流しよう(14時間)

- ・ 授業前の児童の思い：笑顔で交流したい お話を大切にしたい

(地域で開催される祭りへの参加 個人で活動の振り返り⇒アンケートの分析)

- ・ 『祭りに来た人に「楽しんでもらい」、「仲良くなる」ことができたのだろうか』自分の振り返りやアンケートの分析から課題や改善点について話し合う
- ・ どんな会話をすれば「仲良くなる」に近づくか話し合う
- ・ 授業後の児童の思い：「次のケアプラザでの交流では、相手とのお話や知っている技から関連付けて、自分の技の中から一緒に楽しめる技を見つきたい。「あやとりのお話を楽しむことがぼくたちの仲良くなることだと思う。」

## ② 深い学びの児童の姿

授業前は次の交流の内容が「笑顔で」「お話」と漠然としていた。技と相手のこと、技と技を会話でつなぐことによって、自分と相手をつなぐ「お話」を考えることができ、「仲良くなる」につながる交流を考えられていた。また、交流を繰り返し行う中で相手との具体的な話が多くなり、「交流」「つながり」についての価値観の変容が見られた。交流手段の一つとして、あやとりに新たな価値を見出すことができていた。

## (2) 『児童の学びの拠り所となる全体計画と年間指導計画の作成』について

「探究的で深い学び」を実現するためには、学びの拠り所となる全体計画は大切である。平成30年度から実施されるにあたって、今年度中に作成しておく必要がある。そこで、作成にあたってのポイントが提案された。

- ① 目標…学習指導要領の第1の目標と各学校の学校教育目標を踏まえて作成
- ② 内容…「目標を実現するにふさわしい探究課題」と「探究課題の解決を通して育成する具体的な資質・能力」からなる。

## 2 協議内容 「探究的な学習にしていくための工夫・改善」

- ・ (1)について まちとのつながりを考えると、人とのつながりははずせない。
- ・ (2)について 拠り所として学校の独自のものをつくる。推進会議で、これまでの実践を話し合い、概念的に高めていくために知識・理解を整理する。目指すべき児童の姿を想定して行っている。横浜市は、概要を整理している。各教科のカリキュラム・マネジメント要領を作成している。

## 3 まとめ

- ・ 課題との出会いは重要。工夫次第で、児童が主体的になる。
- ・ 児童の学びによりそって、柔軟に学習に取り組むようにする。
- ・ 振り返りを大切にする。気付きをもたせ、意識化できるようにする。友だちと共有したり、次の課題設定になったりする。
- ・ プログラミング教育はカリキュラム・マネジメントが大切。学習を必然的なものにする。

## 4 全体協議 「探究的な学習にしていくための工夫・改善」

<各グループで出た意見のまとめ>

- ・ 実態に合ったテーマを設定したい。教員が高いものを求めてしまうために達成できないことがある。
- ・ テーマは児童の気持ちや自分事としてとらえられるものを設定したい。地域にはたくさんさんの財があり、魅力を感じるものはいくつもあるはずである。
- ・ 全体計画の縛りがあるとうまく総合が作れないのではないか。全体計画の作り方、使い方を知る機会が欲しい。
- ・ 教員同士がつながることで次年度に総合がつながっていくのではないか。

- ・ 整理・分析にかける時間が必要。栽培活動はくりかえしの学習に耐えられない活動なので、総合のテーマには向かない。

## 5 全体まとめ

- 提案1. 2について 課題設定にあたって、ワークシートで児童の思いを聞くなどして、児童の思いを語らせるところから始まっている。教員は児童に資質・能力をどのように身に付けさせるか見通しをもって、カリキュラムデザインを描いている。児童のつぶやきを想定して、計画を立てている。だからこそ、児童の主体的な学びが続いていく。
- 次期指導要領について
  - ・ ベテラン教員が減る中で、技術の伝達が難しい時代になった。次期指導要領で具体的に目標や計画の立て方などが具体的に書かれるようになった。
  - ・ 学校教育目標をもとに総合的な学習の時間の目標をつくる。各学校の総合的な学習の目標を立て、探究課題を設定する。資質・能力を明らかにして活動だけではなく学びにつなげることが大切である。
  - ・ 授業改善、全体計画、どちらも大切である。カリキュラムデザインは教科を越えて学びをつなげていくこと。知識と知識、技能と技能、場面と場面がつながり、深い学びとなっていく。
  - ・ 移行期間については総合的な学習の時間から 15 時間を外国語に充てることは可能だが、移行期間終了後は総合的な学習の時間を 70 時間に戻す必要が出てくる。